

研究ノート

ヤスパースの科学論

八 田 善 穂

ヤスパース¹⁾の科学に対する考え方の特色は、科学が哲学と不可分の関係をもつものとして捉えられていることである。そしてこのことは、現代の哲学にとっても、また科学にとっても、重要な問題を提起しているように思われる。そこで以下順次その特質を明らかにしたい。

(一)

ヤスパースによれば、科学には三つの根本的な特徴がある。すなわちそれらは、

- (1) 科学は方法的認識であること。
- (2) 科学的知識は必然的に確実であること。
- (3) 科学的知識は普遍妥当的であること。

である²⁾。

また、これらに加えて、特に近代科学に関しては、さらに以下のような特性が指摘される。

- (a) 精神自体が普遍的であること(あらゆることがらを対象とすること)。
- (b) 原則的に非完結的であること(無限の前進を意図すること)。
- (c) それ自体個別的知識でありながら、お互いの連関を求めあうこと。
- (d) 探求が徹底的であること³⁾。

1) Karl Jaspers (1883—1969).

2) 『歴史の起源と目標』(“*Vom Ursprung und Ziel der Geschichte*”, 1949) 重田英世訳 昭和39年理想社 157頁。

『大学の理念』(“*Die Idee der Universität*”, 1952) 森 昭訳 昭和30年理想社 26頁以下。

3) 『歴史の起源と目標』 157頁以下。

『哲学と科学』(“*Philosophie und Wissenschaft*”, 1948) 橋本文夫訳 昭和26年桜井書店 19頁以下。

あるいは次のようにもいわれている。

「第一に、必然的な、疑いえない確実性を打ち建てようとの意志、第二に、実験において確証されている時にのみ有意義とみなす思惟、第三に、認識できる個物に、認識できない全体に先立つ優位を与える研究態度、及び、その研究をもって、見渡しがたい、科学の無限の進歩に奉仕する精神、第四に、技術的効果を発展させようとの意志、第五に、新たなものへの情熱である⁴⁾。」

そしてこれらの、特に初めの三つの特徴が、科学的知識と然らざるものとを明確に区別する基準となるのである。またここで重要なことは、科学的知識はこれらの特徴をもつことにより、その普遍妥当性及び確実性に関して、方法ならびに前提と相対的な関係に立つことになることである⁵⁾。

すなわち、全ての知識の確実性および普遍妥当性は、一定の前提や方法の下においてのものであり、決して唯一絶対のものではない。換言すれば、科学的知識の内容は、否定しがたい普遍妥当的な正しさのみが取り上げられる⁶⁾と共に、科学は全て特殊な学であり、万能の方法はなく、その都度特殊な方法により特殊な対象に向かうものであるということである⁷⁾。

「各科学は方法と対象により制約されている。どれもが世界へ向けられた一展望ではあるが、どれも世界を把握しない。どれもが現実の一面面をいい当てているが、現実そのものをではない。おのおのはおそらく、およそ現実の一面ではあるが、全体としての現実に該当しない。もろもろの特殊科学は存在するが、現実的世界全体に関する学としての一なる

4) 『デカルトと哲学』(“*Descartes und die Philosophie*”, 1948) 重田英世訳 昭和36年理想社 93頁。

5) 『哲学と科学』 39頁。

6) 同書 41頁。

7) 『現代における理性と反理性』(“*Vernunft und Wiedervernunft in unserer Zeit*”, 1958) 橋本文夫訳 昭和49年理想社 14頁。

科学は存在しない⁸⁾。」
「全ての科学は、かくかくの前提のもとで、有意味に、かつ一貫的に、それ自身を把握するという一つの試みにほかならない⁹⁾。」
「諸科学は、それらを総計しても、全体としての現実に一致しない¹⁰⁾。」

このことに関して草薙正夫氏は次のように指摘している。

「従ってまた現実的には、科学的探求の道は無限であって、それは完結することがない。それによって科学の道は、無限の進歩発達の過程となる。それゆえ科学が世界を一個の閉された全体として完結さすならば、そのことは却って、進歩発達という科学の本性をそこなうことになるわけである。科学的認識においては、もとより世界が認識可能であるということが前提とせられねばならない。しかしこの前提には二様の意義がある。第一は、世界のうちにおいて個々の対象が認識可能であるということであり、第二は、世界が全体として認識可能であるということである。第一の前提は正しいが、第二の前提は誤りである¹¹⁾。」

「世界は無限であるからして、科学的知は無限の進歩の過程にあるが、それがゆきつく限界は存在しない。従ってそれは原理上未完成である。その反面科学的知は、その都度普遍妥当的な客観性を獲得することができる。それによって科学的知は伝達可能となるのである¹²⁾。」

それゆえ、ヤスパースにおいては、「ある一つの知を絶対化して一個の全体知となすのは誤りである¹³⁾」とされるのであり、要するに、科学的知

8) 『歴史の起源と目標』 160頁。

9) 『大学の理念』 47頁。

10) 同書 161頁。

11) 草薙正夫著『実存哲学の根本問題』 昭和37年創文社 69頁。

『歴史の起源と目標』 176頁以下参照。

12) 草薙前掲書 73頁以下。

13) 『現代における理性と反理性』 29頁。

識は、このようなものとして、「知りうるものを明確に知るのと同じく、はっきりとみずからの限界をも自覚している¹⁴⁾」ものであり、科学によって世界を全体として認識することはできない¹⁵⁾のである。

そこでこのことをわきまえぬ態度に対するヤスパースの批判は非常に厳しいものである。

草薙氏によれば次の通りである。

「……（科学の知が一切であり、最高の知だと信じられる）その結果生ずるものは、科学万能という信仰である。しかしあらゆるものが、科学的に解釈せられて、それが一切だとせられるならば、自らを科学的知と僭称することによって、非科学的な知が、あたかも真実の科学的知であるかのように誤信せられて、いわゆる似而非科学が横行する危険が生ずるであろう。かくて科学的知が一切であるという信仰は、一方において、われわれを科学万能という迷信へ導くとともに、他方では、科学の限界を無視して、科学のなしえないことを科学に期待したならば、ひとは甚しい幻滅を感じるだろう。そして嘗ての盲目的な科学的迷信は、今度は一変して、科学が憎悪と軽蔑の対象となるであろう¹⁶⁾。」

またヤスパース自身によれば、例えば次のようである。

「互いに異質的なものが間違っ入り組んだために、ここには、知ったかぶりの態度とか、単なる尤もらしさを得意とする満足感とか、無批判に物がわかったり主張したりする生意気さとか、真に検討し、人の言葉を聴き、比較考量し、吟味を加え、原理的に省察するといった能力の欠如とかいうことが、全般的に生じているが、これは小範囲の日常生活にも広く見られるところである。

腹に据えかねるのは、科学の名を借りておよそ科学性とは真反対なこ

14) 『歴史の起源と目標』 179頁。

15) 同書 177頁。

16) 草薙前掲書 81頁以下。

とが主張されるということである¹⁷⁾。」

「ひとが科学を目して真理を把握する唯一の仕方であるとしてこれに固執し、他の一切のものを拒否するとすれば、ひとは哲学することを放棄してしまうことになるであろう¹⁸⁾。」

すなわち、科学は、前述の諸特徴と関連して、次のような限界をもつのである。

- (1) 科学的な事物認識は存在認識ではない。すなわち科学的認識は特殊な現象領域のみを対象とする。
- (2) 方法的正確さとは、真理を所有することを意味するのではなく、単に真理の探求心を満足させることを意味するのみである。
- (3) 科学的な正確さは本来的な目的における確実さではない。
- (4) 科学的認識は人生にとってのいかなる目標も与えることができない。
- (5) 科学はそれの固有の意味への間に対して答を与えない¹⁹⁾。

そして科学がこれらの限界をこえるとき、人は科学に対する迷信を抱くことになり、それが裏切られると、今度は科学が憎悪と軽蔑の対象にすらなるのである²⁰⁾。

(二)

そこで当然必要となることは、次の三点である。

- (1) 科学的な名を僭称する哲学的全体知の超克。
- (2) 諸科学の純粋性の獲得。

17) 『哲学と科学』 29頁。

18) 『哲学的世界定位〔哲学Ⅰ〕』(“*Philosophie I Philosophische Weltorientierung*”, 1932) 武藤光朗訳 昭和39年創文社 386頁。

19) 『実存哲学』(“*Existenzphilosophie*”, 1938) 鈴木三郎訳 昭和36年理想社 25頁。
『大学の理念』 39頁。

『ニーチェ(上)』(“*Nietzsch*”, 1936) 草薙正夫訳 昭和41年理想社 307頁以下。

20) 『大学の理念』 40頁。

(3) 哲学の、近代科学により生じた条件の下での、再建²¹⁾。すなわちここで科学と哲学との関係が問題となる。

ヤスパースによれば、「科学と哲学とを厳密に区別してこそ、両者の不可分の関連が純粹かつ真実に造り上げられる²²⁾」のであり、科学の純粹性を確保することは、反面、哲学の純粹性を確保することに通ずるものであり、哲学と科学は決して無縁のものではなく、むしろ切り離し難い関係をもつものである。

「一方において哲学と科学とがお互無しには可能でなく、他方において曖昧な混合ももはや在りえないとすれば、今日の課題は、分離の後に両者の真の統一を実現することである。哲学することは科学的思惟と同一的でも、またそれに対立するものでもない²³⁾。」

それでは、まず哲学と科学との違いはどのようなものであろうか。

科学が特殊な対象に関する特殊な知であるのに対し、哲学はそれとの比較でいえば全体知である²⁴⁾。しかしながら、ヤスパースにとって、「哲学が要求する全体性は、個々の知識を集合することによって得られるものでなくして、それは生ける未分の統一的全体でなければならないからして、抽象的な個別科学の知をいくらよせ集めても、それは本来の意味における全体知となることはできない。ヤスパースによれば、哲学はいかなる意味においても、直接的に捉えられるような対象的全体知ではない²⁵⁾」のである。

哲学と科学の相違についてのヤスパースの所説は例えば次のような文章に見ることができる。

まず対象の相違について、

「比喩的な意味以外の意味における何らか一つの対象を哲学にあたえ

21) 『哲学と科学』 31頁以下。

22) 同書 42頁。

23) 『実存哲学』 26頁。

24) 『哲学的世界定位〔哲学Ⅰ〕』 378頁。

25) 草薙前掲書 64頁。

ということ、科学的認識の形式を誤って哲学の上に持ち込むことにはかならない²⁶⁾。」

「私が対象それ自体を思念する場合、私は科学の中に在るのであるが、しかし私が対象の中で視線を存在に向ける場合、私は哲学しているのである²⁷⁾。」

すなわち科学の対象は、現象の世界であり、対象として認識可能なものである。それゆえその対象は、完結した全体として直接知られるようなものではなく、実在知が統一的な世界像として完結することは不可能であり、可能なものは単なる諸科学の一体系にすぎない。

これに対して哲学の対象としての存在は、自分自身をもその内に含むということからしても、そもそも認識の対象とはなりえないものであり、むしろ哲学は対象なるものをもたないという方がより適切であろう²⁸⁾。

次に主体の相違について、

「科学は、研究者の存在には係わりなく現に在るがままのものであるところの現存在を、研究する。哲学するはたらきは、私自身が存在するという事を通じて経験されるところの存在を問題とする。私は、私が私自身を通じて如何に存在するかというその仕方に従ってのみ、存在について知ることができる。それ故、哲学的知識は、私自身の存在に依存している。それは私の存在の自己確認なのである²⁹⁾。」

この点に関する草薙氏の指摘は以下の通りである。

「科学的知の主体が没個性的な抽象的一般者であることにおいて、科学的な知にあっては、知るものが誰であるかということは問題にならない。ところが哲学的な知においては、知る者が誰であるかということが

26) 『哲学的世界定位〔哲学Ⅰ〕』 378頁。

27) 同書 379頁。

28) 草薙前掲書 68頁以下。

29) 『哲学的世界定位〔哲学Ⅰ〕』 385頁。

重要な問題になってくる³⁰⁾。」

そしてこのことは、科学の対象（知識）が抽象的なものであるのに対して、哲学の知識が独特の意味において具体的なものであることと密接に関連する。

「眼で見られたものが具体的だとはいえない。それは単に視覚という一個の立場だけから抽象的に見られたなすぎない。それに反して具体的とは、本来統一的総合的な立場を意味するのであるが、それは個々のものをよせ集めたという意味での総合的な立場ではない。抽象的なものをいかに多くよせ集めても、具体的なものとはならない³¹⁾。」

「具体的とは、もっとも根源的な未分の状態を意味するのである。それは一切を自己のうちに統一的に含んだもっとも根源的なものである³²⁾。」

「科学的知が狭い对象的知に束縛された強制的 (zwingend) な知であるのに反して、実存知としての哲学的知は、何ものにも捉われぬ自由な知であるといわねばならない。それはどこまでも本来的に私自身の知であることを要求する³³⁾。」

そしてこのことから、哲学的知識が科学のような普遍妥当性を本来的にもたないことが容易に理解されよう。このことに関してヤスパースはガリレイとブルーノーを比較して次のように述べている。

「……だからこそガリレイは、意味深くも、〔彼の地動説を裁く〕異端審問の権力のままで、〔正確な〕彼の主張を取消したのである。（地動説を取消した後、彼は『それでも地球は動く』と発言したが、この発言は、よしんば彼によってなされなくとも、当然〔誰れかによって〕発明されたものであった。ガリレイは地動説の取消しがその真理〔のもつ正

30) 草薙前掲書 70頁。

31) 同書 71頁。

32) 同上。

33) 同書 72頁。

確さ]をいささかも 変えるものでないことを知っていたのである。)彼ど
反対にブルーノーは、永遠に記憶さるべき克己の過程においてヒロイズ
ムを示した。このヒロイズムは、中心的意義をもたぬ自説ならいつでも
取消す用意を彼にせしめたが、しかし哲学的な根本確信を否認すること
を彼に許されなかった。何故なら[主体と結びつてのみ 真実である彼
の]確信は、科学的強制的な洞察とは反対に、自説の取消しによってそ
れ自信の真理をもまた同時に無くなるような性質の洞察であり、本来そ
れに対する哲学者の熱狂的な固執によってのみ証明される性質の洞察で
あったからである³⁴⁾。」

ヤスパースによれば、デカルト的な合理主義哲学は、真理の確実性への
衝動から出たものであり、本質的には科学と同じものなのである。

「近代科学においては当然な、それどころか必然的な権利をもった
『新たなもの』の意義と価値を、デカルトは、それがふさわしくない場
所たる哲学に持ち込んだのである³⁵⁾。」

さらに哲学と科学との、方法の相違についてヤスパースは次のようにい
う。

「学者として私は私自身を生活から遠ざけ、客観を客観それ自身とし
て把握し、諸々の普遍妥当的な規準と証明を求める。単なる生活は私的
なものであって、その中では私は、研究の場合とは別の態度をとる。し
かし、哲学する者として私は、単なる生活と研究のいずれへも帰環す
る³⁶⁾。」

これは前述の対象・主体の相違から、自ら明らかなことであろう。

要するに、これらの相違はお互いに必然的な連関をなすものである。

ヤスパースによれば、特に19世紀以後、諸科学の目覚しい発展に伴い、

34) 『大学の理念』 27頁以下。

35) 『デカルトと哲学』104頁。

36) 『哲学的世界定位 [哲学 I]』 389頁。

科学と哲学の関係は鋭い問題となり、特に科学の側からは、哲学は科学たるべしという要求が掲げられた。

そしてこの要求に対して哲学のとった態度として三つのものが挙げられる。一つはこの要求を正しいものとして承認し、哲学独自の課題としては哲学のみとするか、あるいは論理学と認識論に限定しようとするものである。また別な態度ととしては、上のものとは逆に、科学からの要求を全面的に排け、いわば反主知主義を唱えるものがあり、さらに第三のものは、科学の方法による全知の試み（哲学）である³⁷⁾。

しかしながらヤスペースによれば、これら三つの態度はいずれも、当初の科学からの要求に対して、哲学本来の意義を捉えることにはなっていない。第一と第二の場合においては「哲学が科学に身売りしたにもせよ、或いは科学を全く否認するにもせよ、いずれにしても、それはもはや哲学ではない³⁸⁾」のであり、また、第三の場合においては、結局哲学と科学との誤った混同におちいるのである³⁹⁾。

このような指摘のうちに、我々は哲学と科学の関係に関するヤスペースの独特の思想を見ることができよう。両者はそれぞれ独自の意味において必要であり、また独特の意味において不可分の関係にあり、さらにお互いに他を必要としているのである⁴⁰⁾。そこで次に、この事態をさらに明らかにせねばならない。

(三)

まず科学が哲学を必要とするという面から検討しよう。

ヤスペースは、「科学には指導が必要である」ことを指摘する⁴¹⁾。さもな

37) 『哲学と科学』 13頁以下。

同書 26頁以下。

38) 同書 18頁。

39) 〔註〕10) 参照。

40) 〔註〕23) 参照。

41) 『大学の理念』 52頁以下。

くば、自己自身の意味を説明することのできない科学は、そのままで放置されれば放縦におちいり、あるいは孤立無援のものとなる。そこで科学に生命を与え、その限界や課題を自覚させるものとして、哲学による指導が必要となるのである。

しかもこの哲学による指導は、科学の外部から、科学とは無関係なものとしての哲学から一方的に与えられるようなものではなく、両者にはさらに内面的な連関と結合がある。

それは、科学の目的が、ヤスパースの指摘によれば、効用性でもなく、単なる自己目的性でもなく、むしろ根源的知識欲(ursprüngliches Wissenwollen)である⁴²⁾ことに由来する。

「このヤスパースの『根源的知識欲』というのは、個別的に分散した多様な知識に安んずることなく、存在の一者(das Eine)へと向うところの、われわれの知的欲求を意味する。このような知識欲は、もはや単なる科学的知識欲でなくして、哲学的知識欲を意味することは、もはや明らかであろう。その意味で科学的知の活動の根源には、哲学的知がひそんでいるといわねばならぬ⁴³⁾。」

「科学を開明するにはその根源、すなわち哲学へまで遡らねばならぬ。科学の本来の前提は認識の情熱である。然るにこの認識の情熱はすなわち『哲学すること』であり、またその手段は科学的方法に存する⁴⁴⁾。」

すなわち知識欲は個別を通して一者へと向い、「一者との関係によってこそ、科学は専門的に分化しているばあいですら、たましいを与えられるのである⁴⁵⁾。」換言すれば、本質的に個別的知識である諸科学を、根底で貫き支えるものとして、自ら哲学が要求されるのである。

それゆえ、「われわれがしばしば知識に覚える不満は、実はわれわれが

42) 同書 40頁以下。

43) 草薙前掲書 85頁。

44) 『ニーチェ(上)』 314頁。

45) 『大学の理念』 54頁。

〔超越者による〕内面的指導から脱線しているために起る⁴⁶⁾』とすらいわれ、また次のような指摘もなされるのである。

「数十年来、科学の無仮定性（但し批判的研究者は誰れもそれを主張しなかった）をめぐって、やかましく論議されてきたが、科学が仮定を負わされていることを強調するさいに陥りがちな誤りを、ここで指摘しておくことがおそらく必要であろう。そのばあいには、全ての科学から意味がうばわれて、仮定の方に意味が与えられるわけで、〔そうなると今度は、〕仮定の方が独断的なものになる。善意な人々ではあるが、しかし科学のなかでは何の仕事もせず、また科学を方法的に勉強したことの無い伴奏家たちが、〔科学の仮定性をやたらに強調して、〕自分らの全然知ってもいないことまで非難する。彼等は科学の代りに、それとは全く別な政治や、教会や、暗い情熱を目標の宣伝だけを、求めているのである。愛しつつ事物と取組み、具体的に研究するかわりに、彼等は全体者について概括的な冗舌をし、誤った哲学論議にふけるのである⁴⁷⁾。」

次に、哲学が科学を必要とするという面であるが、これは約言するならば、「意識的となった哲学は、科学を通してきたものであり、方法的考察によって導かれ、科学的精神によって貫かれたものでなければならない⁴⁸⁾」ということであり、科学は哲学にとって不可欠の前段階とされているのである。すなわち哲学もまた科学のもつ探求精神や確実性への意志、公正な知的良心、批判精神等をもたねばならないということであり、さらに、個々の科学的成果を積極的に自らの内にとり入れることも当然必要である。さもなくば、哲学もまた独善的なものとなる危険を多分に蔵しているのである。

勿論、前述の如く、科学と哲学とはそれぞれその内容を大きく異にする。

46) 同書 57頁。

47) 同書 51頁。

48) 草薙前掲書 79頁。

それゆえここで指摘される事情は単に対象あるいは主体あるいは方法における同一性もしくは類似性として捉えられてはならない。重要なことは、科学が、ヤスパースにおいて、欺瞞を曝露するものであり、あらゆる批判を受け入れるものであって、「批判を受けまいとする者は、本当に知ろうとはしない者⁴⁹⁾」なのであり、こうしたものとして、科学はまさしく誠実さの条件であるということである。そしてそれゆえにこそ、「科学的な態度並びに思考方式の喪失は同時に哲学することの誠実性の喪失である⁵⁰⁾」という指摘もなされるのである。

(四)

以上ヤスパースの科学論を通覧してきたわけであるが、その特長は、初めにも述べた通り、科学と哲学との相補性が独特の形で積極的に捉えられていることであろう。今日の科学文明の中で、もはや科学の意義を否定することはできず、さりとて、科学のみで全てが解明・解決されることもない。必要なことは、まさしく科学と哲学とが内的結合にもとづいて相補うことである。そしてこの、両者（科学と哲学）を明確に区別した上でその内的結合を説く点こそが、ヤスパースの科学論の最大の特長であり、科学的認識の限界を鋭く指摘したものとして、重要な意義をもつと思われるのである。

49) 『大学の理念』 61頁。

50) 『実存哲学』 27頁。